

ちよつと危ない色艶都々逸
笑って許して！

Part 9
短冊本



ゆうほ

外じや吠えてる

虎でも妻に

睨まれ萎えりや

猫かぶる

ゆうほ



別れさだめと

諦めながら

ふっと出てくる

君にくい

ゆうほ



にわか降りだし

相合傘で

片袖濡れよと

おつな雨

ゆうほ



文楽人形の

涙は出ぬに

わたしの涙

何故に出る

ゆうほ



外じやイケてる

輝くスター

妻の前では

星の屑

ゆうほ



財布軽く
頭は薄い
竿も短小
今風な

ゆうほ



妻は奥様

カミサマ出世

言うなり地藏

俺左遷

ゆうほ



わが身サイズを

縮めて生きりや

余裕出てくる

浮世かな

ゆうほ



クシ刺しされて

衣をまとい

灼熱地獄も

堪えてカツ

…串カツ



酒を飲まされ
温められりや
口を開いて

身もみせる

…ハマグリ酒蒸し



皮を剥いたら
手でしっかりと
擦って汁出す
おろし金
…とろろ汁



穴に無理やり
みを入れながら

挟んであげる

君の為

…蓮根フライ



キユとどじてる

やわ肌舌に

なかのうま汁

しみて出る

…小籠包



お湯につかった
白肌ひかり
のったカツオが
たつよな
：湯豆腐



寒ささらされ

干されりや皺に

重石乗せられ

幾歲月

…沢庵漬け



干され叩かれ
味出る頃に
切り身にされて

つまの上
…鯉タタキ



生まれたままの

きみ割りこんで

そつと口入れ

舐めるよに

…生卵御飯



あたくし好みの
マツタケながめ

手にとりいかに

悩む夜

…みてるタケ



今ムに捲かれて
くすぶるハート

君に食われりや

本望さ

…焼き鳥屋ハツ

月うさ



自分の道は
自分で作り
道を外すも
人だもの

ゆうほ



人生如何に

生きるか悩み

とどのつまりが

人づくり

ゆうほ



色々理屈を
弄繰り回し
関でするのは
皆同じ

ゆうほ



親を罵る

言葉の裏で

わが身罵る

自分いる

ゆうほ



命の炎は

消えるがさだめ

お釈迦様でも

あの世逝く

ゆうほ



出会うさだめと

こころを括りや

地獄極楽

この身受け

リーベ



川の流れと

あなたの情け

何処で切ったら

よいのやら

さくら



雨のトレモロ あなたと聞いて

今夜の幸せ ひとりじめ

さくら

指で叩かれ 心も踊り

体トレモロ 震え泣く

ゆうほ



ほのかに洩れる 小さな灯り
ふたつの影が 重なって

さくら

ならぬ道なら 影だけひとつ
横にいながら 遠い君

ゆうほ



しがな^い俺に 文句も言わ^ず

黙^{って}俺に ついて来た

さくら

竹に朝顔

絡^{んで}咲くと

たとえ根の無い

垣根^{でも}

ゆうほ



隠しごとなど 何にもないと

うのはな匂う 垣根ごし

さくら

うのはな後ろ 隠れるように

そつとまってる 顔にうそ

ゆうほ



着物一枚 買ってもやれず

あなたがいれば それでいい

さくら

あなただけいりや 言っでは見たが

諭吉連れなら もっとよい

ゆうほ



泣いているのか 肩ふるわせて

グラスを抱いて うずくまる

さくら

泣いて絡んで あずけたこの身

せめて一夜は うちのひと

ゆうほ



愛のささやき 忘れちやないか

この件につき ツイッター

…つぶやき女 月うさ

ふられぶつぶつ 泣吹き慌て

恋の縁りごと 人にまく

…ぼやき男 ゆうほ



言葉なんかで 伝わるものか

君しか映らぬ 眼を見ろよ

…眼力(めぢから)男 月うさ

少しのホントで 大きなウソを

誤魔化す積りが お見通し

…千里眼の女 ゆうほ



捨ててしまえぬ 思い出さえも
忘れたふりで 無いものに

月うさ

捨てたふりした 思い出なのに
思い出せよと 顔を出す

ゆうほ



捨ててしまえば心の隙間

埋めるものなど ありはせぬ

月うさ

捨てて燃やした 思い出探し

埋もれ火おこし 恋が燃え

ゆうほ



綺麗に咲いて

散り際ツバキ

未練残さぬ 潔さ

月うさ

咲くも枯れるも 思いのままに

誰に遠慮が いるものか

ゆうほ



金は天下を
周ると言うが
俺の家だけ
天下外

ゆうほ



金など浮世の

方便なのさ

言つて諭吉に

位かさされる

ゆうほ



金がもの言う

浮世であるど

あたしやあんたの

ものがよい

ゆうほ



金につられて

おまえのものに

おまえあたしの

金つるに

ゆうほ



口車のり

ハツシヤはしたが

ムチン乗車じや

しごかれる

ゆうほ



腐れ縁ゆえ

生きるの死ぬの

揉めてどうどう

腐れ金

ゆうほ



打算で生きて

破産となって

死んで御破算

誤算のみ

ゆうほ



金のなる木が

あつたとしても

ぬしのホッキの

方が良い

ゆうほ



金に糸目を

つけぬと言うが

おまえ糸切れ

尻のよう

ゆうほ



金目のものなど
ある訳ないが
金じゃ買えない
こころ「粹」

月うさ



金喰い虫に

スネかじられる

出世払いの

決め台詞

月うさぎ



プラマイゼロで
人生用じる
理想の成仏
未練なし

月うさ



愛が全てじゃ
食べては行けぬ
お金だけでは
砂を噛む
月うさ



昼の現が 夜夢となり
夢が現の 種となる

真恋

夢の種から うつつの花が
咲けど 掴めぬ 夢の花

ゆうほ



夢でなりとも逢わしておくれ

夢じや浮名は立はせぬ

真恋

夢で出逢って心を盗られ

覚めりやうつきをぬかす恋

ゆうほ



現心で 柱にもたれ

起きていながら 主の胸

夢を見ている うつつの君に

忍び込めない もどかしさ

真恋

ゆうほ



泣いた拍子に 覚めたが口惜し

夢と知ったら 泣かぬのに

真恋

夢で泣くよじや まだ恋ならぬ

夢もうつも 酔いしれる

ゆうほ



逢うた夢見て 笑うて覺めて

四辺見回し 涙ぐむ

真恋

逢うた夢なら なぜ好きにせぬ

どうせ今宵も 乱れ夢

ゆうほ



立てておだてて 気分をよくし

働かせるのが 一番よ

さくら

指の動きで 吹き込む命

浄瑠璃人形と うりふたつ

ゆうほ



いざと言うときや 男でなけりや

男は頼りに なるものよ

さくら

ひるにや忝ない おまえだけれど

夜にや立派な 立ち姿

ゆうほ



あなた嘘つきいけずやないの
ちやんと奥さん いるじやない

さくら

つまの座なきや 付き合えないと
何に恋して いるのやら

ゆうほ



誰もいないと 言っではないよ

お前が勝手に 思いこみ

恋は誤解で 始まるものさ

全てわかりや 恋は消え

さくら

ゆうほ



人の心は 移ろうものと

分かっていても 悲しいわ

さくら

思い通りに なるよでならぬ

心わが身の 糸を引く

ゆうほ



逢瀬出し抜け やらずの雨に

傘を張らない 意地っ張り

ゆうほ

主のたわごと さらりと交わし

ひとりあやとり 意地通す

遊びびと



女意地なの 捨てられるより

捨てて流して ほぞを噛む

ゆうほ

生木裂くよに 別れて来たが

この身空っぽ 根無し草

遊びびと



他愛ないこと 二人で遊び

これも大事な 思い出に

ふたりだけ知る むつごと手口

今宵も一度 見定める

遊びびと

ゆうほ



先に遊ぶのも 残され進むも

結ぶ二人の 糸まかせ

遊びびと

天にあがると 風糸にぎり

いつか添い飛ぶ 夫婦風

ゆうほ



こころ速わす こころの仕業

悟りこころの やすらかさ

君をまどわす タネみりや俺が

君の揺り籠 口惜しい

遊びびと

ゆうほ



いいのあなたに 抱かれりやうれし

神も仏も 蚊帳の外

遊びびと

恋火焼かれて 皆灰なれど

熱い思いの 起証文

ゆうほ



恋のジグソー 最後のピース

かけら無くして 未完成

恋の双六 賽の目次第

裏目に泣いて 振り出しに

月うさぎ

ゆうほ



ただ抱きしめて 言葉は要らぬ

時間も止まる 腕の中

月うさ

止まらず元に 戻らぬ時に

全てゆだねる 恋時計

ゆうほ



惚れた弱みを見せたくなくて

主の気を引く素振りする

月うさ

惚れているから強がり言って

拗ねて甘えて瀬踏みする

ゆうほ



金の草鞋で探した女房

メツキ禿げれば肉食系

月うさ

姉さん女房やりくり上手

夫を立てりや下になる

ゆうほ



地獄の沙汰も 金次第なら

香典入れてよ 棺の中

生きてるうちに 香典呑んで

鬼にや掛け取り 末払い

悠

ゆうほ



焦がれつづけて 五十と二年

巻き戻せない 片想い

悔し涙で あの時泣いた

負けて良かった 恋仇

悠

ゆうほ



男の意地は 劔に賭けて

女の意地は 恋に懸け

悠

人の字を見りや 釣りあいとれて

意地と恋とも それなりに

ゆうほ



夢か現か まぼろしの君

寝ても覚めても 恋しくくて

悠

ぬしのこころの 恋火がたより

うつつ漕ぎだす 逢瀬舟

ゆうほ



夢の中では ままならぬ恋

さりどて現 手も出せぬ

悠

ままにするのが いたばの腕で

あたしやまな板 上のこい

ゆうほ



あなたとわたしは 相合傘で

しつぽり濡れて 帰りた

い

傘を手にする わたしの務め

さすかささぬか 主任せ

ゆうほ



泣いて言うなよ 別れの言葉

別れがつらく なるだけよ

さくら

別れ辛いと 孤独に生きりや

それも艶ない 味気ない

ゆうほ



悔し涙を落とした酒は
苦くてしよっぱい 味がする

さくら

見栄と意地はる 女だからと
悔し涙も 袖時雨

ゆうほ



二人で越えれば 何でもないよ

今夜は呑みなよ 夫婦酒

努力と言う字 おんなの又の

下にカじや 妻任せ

さくら

ゆうほ



あればあつたで 気苦勞たえぬ

何にもないから 気が楽だ

さくら

霞みで生きれる 人ならよいが

慾に足付く ひとだもの

ゆうほ



切れる心は さらさらないが

切れた振りする 身の辛さ

真恋

ふったつもりで つれない素振り

背なが揺れてる 忍び泣き

ゆうほ



いやに絡んだ 不意気な恋路

結ぶ出雲も 困りもの

結ぶ神いりや 縁切り神と

神も男も 花添える

真恋

ゆうほ



水も漏らさぬ 仲とは見えぬ

紙幣(さつ)が結んだ 薄い縁

真恋

拾う御縁(五円)がお前じやないか

穴が結んだ 対むじな

ゆうほ



一人寝る夜も 枕を並べ

一つは主と 抱いてねる

主と添い寝は 腕借り枕

ついで賃料 身で払う

真恋

ゆうほ



和歌は雅よ 俳句は味よ

わけて都々逸あ 心意気

素では言えない ぬしへの想い

口説き都々逸 忍ばせる

真恋

ゆうほ



下手な都々逸 絡まれ嬉し

おなじならぬが ちと意気

男同志で カマ風呂つき

おなじカマ飯 はや仲間

悠

ゆうほ



恋の涙は甘さもあるが

銭の苦勞は 苦いだけ

金は捨てても この恋捨てぬ

主の爲なら 手鍋さげ

悠

ゆうほ



好いて好かれて 共白髪まで
誓った愛も 今、昔

三三九度の 固めを清ましや
後は鶴亀 空と海

悠

ゆうほ



死ぬの生きるの あれほど騒ぎ

三月過ぎれば 余所見する

悠

主がいなけりや 生きてはいけぬ

今じや主いりや 生きられぬ

ゆうほ



手出し金出し

足まで出そと

好かぬお前じや

無駄足さ

ゆうほ



風の音さえ

主来たおもい

下駄の音聞きや

舞い上がる

ゆうほ



今宵うしみつ

出番の時さ

おあしいらない

お岩さま

ゆうほ



九じや離さぬ

お菊に言われ

さらに重ねる

深いなか

ゆうほ



浮世無事越え

あの世で地獄

ほんに息つく

暇がない

ゆうほ



破れ傘でも あるだけましよ

これでよければ 持ってきな

さくら

傘を貸すより 泊って行けど

言わぬ主さん 意地悪い

ゆうほ



最後のお酒をふたりで呑んで

明日は他人の涙雨

他人であろうと なかろと同じ

あなたと同じ 空気を吸う

さくら

ゆうほ



ほたるの宿で燃やした命

ついて消えて また燃える

さくら

突いて混ぜたら 残り火燃える

水を用意の 火の用子

ゆうほ



忍の一字に すっかりなれて

仕事あるだけ ありがたい

会社じゃ言わザル 五時から虎に

床に入れば 盛り猫

さくら

ゆうほ



妻になれない 生涯だけど

ひとりですきる 夏のれん

さくら

女の道が 妻だけなんて

気儘風鈴 風任せ

ゆうほ



ちよいと逢わねば 心は清まず

逢えば引かるる 後ろ髪

真恋

逢瀬過ぎした 乱れた髪に

辛い思いの 恋情話

ゆうほ



共に白髪と誓いし仲も

背中合わせの床の内

あの世高砂も一度帆あげ

ふたり漕ぎだす三途川

真恋

ゆうほ



色の句節は 未だ知りませぬ

聞きたきや寝かした 三味線に

主を呼ぶよに 清搔き鳴らしや

心共鳴る 三味の音

真恋

ゆうほ



小唄都々逸 上手にできて

女ぐせだけ 悪い癖

人に惚れさせ すぎない素振り

殺したいよな 悪い癖

真恋

ゆうほ



昼は人目を忍んでいれど

暮れるとこっそり来る彼方

真恋

顔は見ぬともそばにいるだけで

心休まる恋病

ゆうほ



あなたのために 咲く日を待つて

たった一度の 一夜妻

さくら

味気ないよな 土からさえも

咲くが花なら 恋はなお

ゆうほ



あなたのために 咲く日を待つて

たった一度の 一夜妻

さくら

味気ないよな 土からさえも

咲くが花なら 恋はなお

ゆうほ



一度咲いたら 二度とは咲けぬ

一日花の さだめなの

さくら

たった一日 花咲き実つけ

繫ぐ命の 素晴らしさ

ゆうほ



残りわずかな 虫など呼んで

ほたる来い来い 蚊帳のなか

遊びびと

浮気虫なら 刺されはせぬと

叩きだす蚊帳 またはいる

ゆうほ



如何にオイラがおんな好きでも
ニの足踏むぜ 心ブス

どんなにあんたいケメンでもさ
嫁はいやだよ 女グセ

悠

リーベ



逢いたい見たい恋しい彼方

軽い帯締め 今宵待つ

真恋

触れりや解(ほど)ける 帯締め待てど

謎を解(と)かない 野暮な奴

ゆうほ



暑さしのぎに 団扇で仰ぎ

節電飲み屋 麻のれん

女将団扇で 膝借り寝れば

覚めても一度 狸なる

真恋

ゆうほ



泣きの涙で 港を出れば

次のおんなに すぐメール

ぬしの入り船 窓から見えて

慌て間男 出船乗せ

悠

ゆうほ



世の中デジタル チクタクせぬが
二人はぐくむ 恋の時

柱時計の 振り子の恋は
振られ進むのか 長い針

月うさ

ゆうほ



わかってるのよ 添えないことは

それでもいいの あなたなの

さくら

添って喧嘩をするよりいつそ

離れ恋しいぬしが良い

ゆうほ



粹なほたるの 道案内で

あなたの元へ 返りたい

さくら

尻にひがつく ほたるだけけれど

燃えず我慢の 恋もある

ゆうほ



人は誰でも淋しいものと

二人で覗くほたるかご

清い水しか住めない螢

おまえだけでも願う夜

さくら

ゆうほ



ほたるの宿で 燃やした命

二匹のほたるが 草に落ち

さくら

草で重なり 命を燃やし

新たな命に ひがともる

ゆうほ



路地の小店に 打ち水うって

客を待ってる つりしのぶ

さくら

雀色時

風鈴鳴れば

見あげ涼しげ つりしのぶ

ゆうほ



自分をしっかり持ってる人は

人の話も良く聞ける

さくら

親の説教 灸の熱さ

効き目ゆつくり 後わかる

ゆうほ



出会いどなたの 采配なのか

怨み感謝に 迷う夜

遊びびと

捨てる気がありや そのまませよと

拾い弄る ぬし憎い

ゆうほ



気の無い素振り 涼しい顔で

「ごめん」のひとこと 待っている

折るも立てるも 君なすままに

それが分からぬ うぶな奴

月うさ

ゆうほ



嫁は嫌だよ 唄にもならぬ

わたしや彼方の通い妻

花から花へ 花蜜吸って

飛んで逃げてく

浮気鳥

真恋

ゆうほ



花の色香に つい浮かされて

狂う胡蝶の 夢心

蜜に寄せられ 命を授け

さだめ果たして

胡蝶いく

ゆうほ

真恋



自由な遊びに 自由な世界

それに憚る闇の痴話

真恋

料な色恋

絵になるような

色も褪せるか 俗な痴話

ゆうほ



俺もあほやが お前もあほや

あほの二乗は なんだっけ

あほのふたりで 乗りあひすれば

愉快満たされ この浮世

さくら

ゆうほ



夏のれんなら 風情もあるが
夕立に濡れ 簾髪

ゆうほ頭は 蠅さえ滑る
海にいるなら タコ坊主

悠

ゆうほ



貴方に抱かれ はかない恋が

ひと夜と知りつつ 身を焦がす

月うさ

長い時待ち 君逢えたから
例え一夜も 命継ぐ

ゆうほ



闇に灯るは 迷わず来いと

貴方が示す 恋しるべ

闇に希望の 恋灯がともり

ましてそこには ぬしが待つ

月うさ

ゆうほ



空を流れる ふわふわ雲に

小さな幸せ もらったら

雲の流れに 身をまかせれば

何でこだわる 浮世事

さくら

ゆうほ



眠りうつで
抱かれて目覚め
昇りつめてく

こころちよさ

遊びびと



妬む想いに

あなたを怨み

逢えない夜の

鬼の面

遊びびと



沈む夕日に
佇むまを
抱いて揺らして
母となり

遊びびと



誰ぞ棲んでた

情けの宿を

ちよいと借ります

今宵だけ

遊びびと



ここは通れぬ

しがらみ道か

よけて辿るは

主の腕

遊びびと



ほたる来い来い

この指とまれ

灯る灯りに

身をさらし

遊びびと



三日なりとも
女房にしてと
泣いて俯き
舌を出す

真恋



弁天様だと
口説いておいて
今じゃ私を
山の神

真恋



内の女房は

さざえの様に

しりも頭も

角ばかり

真恋



あやめを菖蒲と
云うたが無理か
場合で亭主も
兄と呼ぶ

真恋



命互いに
ぶつかりあつて
磨けば光る
珠ばかり
ゆうほ



月が電灯
雨水道で
風が頼りの
ヨット上

ゆうほ



命あふれる

この世の中で

逢うが不思議の

縁始め

ゆうほ



ペナン浮草

彼ただよえば

下手な都々逸

ごみだらけ

ゆうほ



長い間 下手な都々逸に
お付き合頂き有難うございます

暫く ヨット廻航の為
都々逸から遠ざかります

また お会いできる日を楽しみに

ゆうほ



一覧表

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part1 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/18432>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part2 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/18285>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part3 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/20624>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part4 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/21269>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part5 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/22137>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part6 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/23574>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part7 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/24721>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part8 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/25380>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸 文章編 執筆中

<http://p.booklog.jp/book/17722>

両本とも毎日更新連載中です。

ゆうほ ペナンの海の上より

ちょっと危ない色艶都々逸笑って許して！ Part8 短冊本

<http://p.booklog.jp/book/27137>

著者：ゆうほ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uoboat/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27137>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27137>